
学園アリスの世界に転生

青桐悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園アリスの世界に転生

【Zコード】

Z3620Z

【作者名】

青桐悠

【あらすじ】

語りてが学園アリスの世界に転生して色々する話。

1話 転生直後

田を覚ますと赤ん坊になつていた。

いくらテンプレ通りの言詞せりふが面白いとはいえ何回も同じことやってたらさすがに飽きるな。次からは別のにしよう。

考え込む俺を余所に周囲はテンプレどおりに進んでいく。

「名前は何にしようかしら」

「清見なんてどうだ。兄さんの娘は柚香ユウコってつける予定よてうらしごとちよつび良いだね!」

「いい名前ね」

「清見、元気な子に育てよ」

どうやら名前は清見に決まつたようだ。

もう一人の転生者は柚香ユウコって名前なのか。柚も清見も柑橘系の果物の名前で蜜柑の仲間だったな、てことは転生先はあの世界か。

考え事してたら眠くなつてきた。寝るのも食うのも好きな俺としては食っちゃ寝できる赤ん坊の時期が一番好きだったりするので、睡魔に抗つことなくすぐさま眠りに落ちた。

2話 夢の中

田を開けたら学園アリスの佐倉蜜柑にそっくりな少女が俺の顔を覗き込んでいた。

「おはよー！」

「おはよー。じゃ無くて、此処はどうへ、私は誰？　じゃ無かつた君は誰？」

「（）は夢の中で私は安積柚香。他に質問は？」

「安積つてことはやっぱ此処つて学園アリスの世界？　夢の中つていつのは何らかのアリスを使つた？」

「やうだよ。私は夢使いのアリスなんだ。あなたは？」

「俺は安積清見。アリスは・・・石使いのアリスだな」

「今の間はいつたい？」

とつあえず神に殺されてから今までの経緯を簡単に説明した。

「以前、分析のスキルを手に入れてたからそれを使って調べたのかかった時間。それよりこれからどうする」

「といつと？」

「アリスをもつてることを隠して学園にかかわらないでいるか、そ

れとも積極的にかかわって原作介入しまくるか、はたまた別の選択肢を選ぶかどれにするかって話だ」

どれを選ぶにしろ俺は彼女に対する協力を惜しみはしない。

不幸な人と一緒にいるより幸せな人と一緒にいたほうが楽しいのだから。

3話 作戦会議

話し合いの結果。安積柚香のことを伯母さん、行平泉のことを叔父さん、他の登場人物に関しては蜜柑と同じ呼び方で統一する事に決めた。原作介入についてはできる限り最大限引っ搔き回すことにした。

「柚香」

「何？」

「ちょっと実験したいことがあるんだけどいいか？」

「いいけど。何するの？」

「夢使いのアリスは魂を夢の中に連れて行くアリスだろ？今まで試した相手は全員目が覚めると同時に体に戻ったから、戻るからだの無い死者の魂を生者の夢の中に放置するとどうなるか試して見ないか？」

「おもしろそうだね」

「だろ？ 問題は誰で試すかだが・・・」

「蜜柑と叔父さんで試そつよ」

「ちなみに理由は？」

「もちろん。それが一番面白そつだから」

「なるほど、んじゃそれで決まりだな」

4話 佐倉蜜柑と接触

「今日は」

「え？ は？ え？」

柚香がにこやかに話しかけているのは対照的に蜜柑は混乱したかのように意味のなさない単語を羅列している。

・・・こきなり田の前に自分と瓜二つの少女が現れたら誰だつて混乱して当然か。

「はじめまして。俺は安積清見、こっちのお前にそっくりなのは安積柚香。お前は？」

「うちは佐倉蜜柑。あんた等は何でいきなり田の前に現れたん？」

「こきなり田の前に現れたわけじゃない」

「清見、それじゃ意味不明だつて。もうひとつと判つやすく書おつ

「柚香は夢使いだ」

俺の説明に対しても柚香は呆れたようなため息をついた。

「もういいわ。私は生まれたときから夢から夢へ移動することが出来るの。夢の中に入らずに夢を覗くこともできるけど夢に入らなければ存在に気付かれないの」

「解ったか？」

蜜柑はあまり理解できていないようだがそれでも考えて答えをひねり出した。

「つまり、柚香と清見はずっと田の前に立っていたけどそれが気づいてなかつただけってこと？」

「やうこひことだ」

「夢の中を散歩してたら偶然、蜜柑ちゃんを見かけて、私にあんまりそつくりだから声をかけようと思つたんだけど夢の中に入るのを忘れてたから私たちの存在に気付いてもらえなくて・・・」

「夢の中に入つてないのが原因だから夢の中に入れば良いってこと気に付いたけど蜜柑の田の前で夢の中に入つたりこななり田の前に現れることになるという事には気付かなくてな」

「驚かせて、ゴメンね？」

「ううん。別に構わへんよ」

「柚香、もう少し時間だから帰るわ」

「え？ 今何時？」

「だいたい〇七・〇〇ぐらいだな。ここで蜜柑、また明日」

「蜜柑ちゃん、またね」

5話 行き平泉と接触

伯父さんの夢の中を何食わぬ顔をして歩いていると柚香の存在に気づいた叔父さんが驚いて声を上げた。

「柚香！？」

やつぱり間違えたか。柚香と伯母さんそつくりだもんな。

俺はあえて不思議そうな顔をしながら柚香に聞いた。

「柚香、知り合いか？」

「ううん。始めてあつた」

「人違いかな？」

俺たちの会話を聞いていた叔父さんが口を挟んだ。

「もしかしてお前は安積由香つて名前じゃないか？」

「確かに私は安積柚香だけど・・・何で知ってるの？」

「俺は生前、アリス学園で教師をしていてその時の教え子の一人にそつくりなんだ」

「そういえば、お父さんには柚香つて名前のお姉さんがいたって言ってたね」

「つまり、柚香と伯母さんを見間違えたってことか」

「私と伯母さんってそんなに似てるのかな？ 世の中には同じ顔をした人間が3人入るって言うけど本等だね」

「蜜柑も柚香と瓜二つだモノな」

蜜柑の名前を出した瞬間、叔父さんの顔が劇的に変わった。

伯母さんが蜜柑を妊娠するのがわかつたのは伯父さんが死んだ後だもんな。死んで十年近くもたつてから実は娘がいたって知つたら驚いて当然だ。

「伯父さん、蜜柑にも会つてみる？」

俺が言つが早いか柚香は伯父さんの手をつかんで歩き出した。

そういえば伯父さんはこの状況を理解しているのだろうか？

6話 作戦実行

「よひ、蜜柑。久しぶり」

俺は開口一番にそう言った。

「久しぶりって、昨日が初対面でしょ」

俺のボケに対して柚香が突っ込む。

「柚香、解つてないな。よく言ひだろ？ 親友に時間は関係ないって」

「それは意味が違う」

もはや漫才になってしまった俺たちをよそに蜜柑とおじさんで話しだした。

「俺は行平泉。お前は？」

「うひは佐倉蜜柑」

「蜜柑は関西出身なのか？」

「うん、うち京都の田舎のほうに住んでんねん」

「せつも昨日が初対面つて言つてたけど親戚じゃないのか？」

「うん、昨日じいちゃん親戚があるか聞いたけどおりさんで

それから起きた時間だな。実験内容を話す」とこいつ。

「蜜柑、実は蜜柑の中に伯父さんを連れてきたのには目的があるんだ」

「目的って何？」

「昨日、柚香は夢の中を移動できるって言つてただろ？　あれは魂だけ夢の中に移動をせせるんだけど魂を夢の中に置き去りにしたらいどうなるかって言いつ実験をこれからするんだ」

「魂を夢の中に置き去りにするって、つまり一度と起きあられへんくなるってこと？」

「大丈夫。伯父さんはもう死んでるから起きれなくとも困る」とは無いわ」

「んじゃ、おやすみ～」

「お休みじゃなくしてお早うだと思つよ」

伯父さんの魂を蜜柑の夢の中に放置してから2年半の月日が過ぎた。

「蜜柑ちゃん、何で怒つてるの？」

蜜柑は今日、怒りながら寝たのか夢が始まつたときからずっと起立つている。

おそらく今日が原作開始初日なのだろう・・・柚香は気づいてないのかあえて無視しているのか。そ知らぬ声で蜜柑に問いかける。

「聞いてよ柚香、あんな・・・」

予想通り原作1話の内容を語る蜜柑と予想通りだといわんばかりの表情をする柚香。

・・・柚香って意外と演技はなのかも

「つまり、蜜柑ちゃんは蜜柑ちゃんが蜜柑ちゃんに黙つて転校したことに対する怒つているのね」

「うそ、蜜が転校すること知らんのうただけやつた」

「蜜ちやんが転校することをいわなかつたのは蜜柑ちゃんのことをどうでも良いくと思つてゐるからだと考えてない？」

蜜柑は押し黙つた。おそらく図星なのだろう

「転校あるじ」とを言われたなかつたのせ蜜柑ちゃんがどうぞどうでもいいんじや無くて、むしろその逆だと思つよ」

「そもそも、転校なんて重大なことさせどもいー奴よつもむしり大事であればあるほど言こ出し難いものだしな」

「だから、強ひやさんが蜜柑ちゃんに黙つしたのはびつとも奥からじやなくて、むしろ大事だったからだと思つよ」

わつかから黙つてゐる伯父さんとも釘刺しつか。

「伯父さん、わから黙つてゐるけど伯父さんもなんか言へよ」

「清見、よく見たら伯父さん蜜柑ちゃんの夢に干渉できくなー」「つまり、蜜柑ちゃんに伯父さんの姿は見えないし声も聞こえない」として」とだよ

「何で?」

「とにかくへ

「伯父さんはアリスで蜜柑ちゃんの夢から出られないだけで夢使い^{あつす}を使つてゐわけじゃないから蜜柑ちゃんの夢に干渉できない。つまり、蜜柑ちゃんが考え方集中してたら伯父さんは夢からはじき出されるんだ」

「柚香の夢使^{アリス}こでじつとかできなーのか」

「蜜柑ちゃんだと伯父さんの夢を操つて一つにしたら伯父さんが夢からはじかれてはなることは無くなる・・・とつとできた。これで良し」

伯父さんを素通りして向いの側を見ていた蜜柑の視線が伯父さんに留まつた。

「これで寝てるときだけじゃなくて起きてる時も会話できるようになりなよ。それと伯父さんと蜜柑ちゃんの体の主導権を入れ替えることも出来るようになつたよ」

「何でもっと早くしなかつたんだ？ 確か前やつて言つてたよな？」

「うへ・・・それは」

「今まで忘れてたな」

「やつやつこえば蜜けちゃんもアリスだつたんだね」

「蜜もつて、他にもアリスを知つてるん？」

「あれ？ 言つてなかつた？ 私はもちろん清見と伯父さんもアリスだし、伯父さんなんか昔アリス学園の教師やつてたつて

「そもそも夢使いを使わずにどうやって毎晩、蜜柑の夢の中に来てると思つてたんだ・・・つて何も考えてなかつたのか」

「・・・」

「清見、そろそろ起きよつか」

図星を指されて落ち込んでる蜜柑を見かねた柚香が助け舟を出した。

どうせ5分とたたずみ復活するから必要ないの。」

「じゃあな」

「うひ、今アリス学園に向かってんねん」

2話目突入か。半年つて長いようで短かつたな。

「蜜柑ちゃんアリス学園に向かってるって何で？ 入学するわけじゃないんだよね？」

柚香の演技力は日毎に増してゐる気がする。

「蜜に会いにいくんや」

「友達に会うために1人で京都から東京まで行くのか。立派だな」

「うひ、東京まで1人で行つてるつて清見にゆつたつけ？」

「柚香の夢^{アリス}使いは入つてる夢の主が聞いてる声を聞くことができる
からな」「

「清見は私のアリス^石ストーンを持つてるから蜜柑ちゃんを見た駅員の人が「女の子の1人旅なんて珍しいな」って行つてるのを聞いたの」

その時、もうじき東京に着くという放送が流れた。

「蜜柑、もうじき東京に着くぞ」

「そろそろ起きよつか

「蜜柑ちゅあん、どうだった？ 蜜柑ちゃんには会えた？」

「うと、ひかアリス学園に入学する」とになつたねん

「ほつ、蜜柑ばどんなアリスなんだ？」

「無効化のアリスや」

「名前から察するにアリスが効かないとかそちらへんか？」

「うん、わづやで」

「それで、どうこう経緯で入学したの？」

「並に会おうとしたアリス学園の方向に向かつてたら途中で詐欺師
にあつてな」

「えつアリス学園に入学するための塾があるー？」

原作でも思つたことだが、蜜柑つてかなりだまされやすいタイプ
だよな。将来詐欺とか似合わないか心配だ。

詐欺にだまされてついて行きそうな様子の蜜柑に耳元で伯父さんが囁いた。

「蜜柑、こいつらの行つてることは出鱈田だ。アリスは生まれつきのもので後から手に入れれるものじゃない」

「えっ、出鱈田なん？」

「出鱈田じゃないって、俺たちはちやんと学園に認められて勧誘してんだって」

「蜜柑、ちょっと変わるだ」

次の瞬間、伯父さんと蜜柑が入れ替わった。

蜜柑の体を借りた伯父さんが睨みつけと詐欺師たちは怖気づいたが、仲間たちがいる前で自分だけ逃げることは出来ないので精一杯の虚勢を張った。

「な、何眼つけてんだ。下手に出たらいい気になつやがつて！ 野郎共、殺つちまえ！」

いっせいに殴りかかってきた詐欺師のじぶしを伯父さんがよけたその時。

「それで何をしてるのかな？」

「そのあと鴨海先生が詐欺師を追っ払つてうちをアリス学園に入学させてくれたねん」

「何事もなく茧ちゃんに会えてよかったです」

「何事もなげりいか問題あつまへじやつた」

「へえ、何があつたんだ」

「変態工口狐にパンツ脱がされた」

「何があつたんだ？」

「棗が学園の壁、破壊して鳴海先生はその対応に行つたからうちには部屋で待機になつたんやけど」

パンツ

「鳴海――――温室から無断で鞭豆盗つたのお前か――――！」

よほど怒つているのかでかい音を立てて入つて来た教師は蜜柑を見るなり謝つた。

「すまん、人違いだ」

謝ると今度は静かに扉を閉めて出て行つた。

「何やつたんや。今の」

「あいつは植物作りのアリスを持つてるからな。杏樹がさつき使ってたむち豆のことで話が有つたんだろう」

「あー、やついえば鳴海先生のアリス聞くの忘れてた！」

「杏樹のアリスはフロロモン体質で使った相手を男女を問わず自分の虜にすることができる」

「お父さん鳴海先生と知り合いなん？」

「俺が生前、担任をした生徒の一人だ」

「へえ、じゃあお父さんのこと知つたら喜びはるやうか」

「俺のことば黙つてくれないか」

「良いにけど何で？」

「それは・・・」

ヒヨシ…

「え。」

「…? 蜜柑…?」

棗にいきなり引っ張られて宙に浮く蜜柑。

「わ・・・・」

「5秒で答える。答えなかつたら、この髪燃やす。お前何者だ。」

「……」

「蜜柑、変わるぞ」

体の主導権を入れ替えたことにより雰囲気が一変する蜜柑。

「 ？」

棗はいきなり蜜柑が殺氣を放つことに驚いて声も出ない。

このままこじう着状態が続くかと思われたその時、ガシャンッと窓が割れ、誰かが飛び込んで来た。

「……てえ。」

「…遅かつたじやん。 流架。」

「誰のせいだと思つてんだよ。 棗」

助けに来てやつたのにー、と体についたガラスの破片を払いながら言つ。そこで初めて蜜柑に気づいたようだ。

「何してんの？ それ誰？」

「起きたらいた。しかも問い合わせたら殺氣を放ちやがった」

バンツと扉が開き、ナル先生と岬先生が入ってくる。

「大丈夫！？ 蜜柑ちゃん！」

「棗つ、流架！！！」

棗が離れた瞬間、わーーと先生に抱きつく蜜柑。よしよし、と頭を撫でていたら棗が窓から出でていこうとしていた。手には水玉模様のパンツを持っている。

「じゃあな”水玉パンツ”。」

「うおーウチもうお嫁に行けへん~。」

「パンツ脱がされたくらいしたいしたことないってー。それに、その時は棗に責任とらせるから」

「いや、大したことだらう……」

「蜜柑ちやん、はい。」

ナル先生がピラと二人の前に出したのは学園の制服。赤のチェック柄のスカート、黒と白のセーラー。

「これ制服。泣いてる顔は蜜柑ちやんには似合わないよ。」

「その後無事に蜜にあひつけられたねん」

「よかつたね

「クラスメイトとは仲良くなれたか？」

「それが・・・」

「あ、お前。やつきの水玉パンツじゃん」

「あ、あの時…。ヘンタイちかん男……っ…！ よくも女子の子にあんなことしておいて…」

「女の敵つ、野蛮人つつ。謝れバカ…！…！」

蜜柑が棗に思いつきり突つかかつた瞬間。蜜柑の体が持ち上がつた。

「おい転入生。棗さんに何調子こいた口聞いてんだ、「ハ」と言つのは、蜜柑をアリスで持ち上げてる少年。その左手は何かを掴む形になつていてる。

ドンッ

持ち上げられた状態から落下して地面に激突する蜜柑。

「何…？」

少年が再び手を動かすが蜜柑には何も起こらない。

「アリスが聞かない！？」

「おい、水玉。お前ビデオアリス持つてんだ

棗が問い合わせるが蜜柑は地面にたたきつけられた衝撃で咳き込むしかない。

「答える」

ようやく衝撃から立ち直った蜜柑だが、誰が言つかと言わんばかりにベシと舌をつきだす

「読めない。読心術が効かない」

心読みの台詞に教室内が騒然となつた。

「何ですって！？ あんた何したの！？」

正田が驚いて叫ぶ

「そんなことよりこの変態工口狐。うちに謝れ！」

「夏田君に何てこと言うの！」

1人の生徒が蜜柑に殴りかかったことにより喧嘩に発展した。しかし蜜柑と伯父さんが入れ替わってるため、蜜柑の方が優勢になっている。

「おい、水玉。お前一週間以内にこのクラスになじめなかつたら正式入学できないんだつてな。お前はこのままだと確實に入学はムリだな。」

「…………」

「ヤレ」から見える北の森。北にを通つて高等部に足跡を残していく
「」とが出来たら蜜柑をアリスとして受け入れてやる」

「蜜柑はその条件飲んだのか」

「つましくつた？」

「うそ、ベアとも仲良くなれたし。やつてよかつたとゆづ」

蜜柑とベアが仲良くなるのはもつと先のはずだが……

「何があったの？」

「森でベアを見かけたときベアが可愛いから抱きつきに行つたら殴
りかかってきて。お父さんととつせに交代して防いだら喧嘩になつ
て、喧嘩してたら仲良くなつたねん」

なるほど。伯父さんを蜜柑に憑かせたことは話の進展を原作から
かけ離すのに大きな影響を与えたようだな

12話 薬の副作用

1年ぶりに叔父さんが尋ねてきた。

柚香の父親

「清見、久しぶり」

「叔父さん、久しぶり」

「今日はお土産に飴を持ってきたんだ後で柚香と食べると良いくだらう」

「叔父さん、美味しそうな飴ちゃん買ってありがとう」

「俺は甘いものより塩辛いもののほうが好きなんだが。子供の振りとこつのも疲れる。」

「お父さん、清見と上の部屋で遊んで来て良い?」

「良いよ。1年ぶりに会ったんだ。いっぱい遊んでおいで」

「子供の振りってのも疲れるな」

「仕方ないよ。私達まだ3歳だもん」

「そうだな、とまあえず飴でも食うか。一個も食わないわけには行かないだろ？」

飴を口にする俺と清見、それが今後の人生に大きく影響するとも知らずに。

と、次の瞬間

柚香の姿が蜜柑と同じくらいの年齢になった。

「ぐつ

驚いた衝撃で飴を飲み込んでしまった。

「「10歳になつた1？」」

しかもでかくなつた影響で服が破れて一人とも半裸になつてゐる。

「もしかして！？」

飴の袋を見ると+フと書いてある

「ガリバー飴つて飲み込んでも効果あつたんだね」

「とりあえずこの半裸状態をどうにかしないといかんな」
ハンターハンター
念を使って服を作つた。

「今のどいつやつたの？」

「以前HUNTER×HUNTERの世界に転生した時に覚えた念を使って作ったんだ。体のサイズに合わせて大きさが変わる機能が付いている」

「幸いこの部屋から外に出るとお父さんのいる部屋から見えないし元に戻るまで外で居よつか。この部屋だったら何時、誰が入つてくるか判らないし」

「やうじよう」

俺達は誰にも見られることなく玄関に到着した。

「無断で出かけると座しまれるかも知れないな。一言声を掛けようか」

「やうだね」

俺は声を張り上げた

「ちょっと出かけてくるよ」

「気をつけ行つてらっしゃー」

「元に戻らない!/? 4時間もたつたのに」

「もしかして・・・薬の副作用かもしけない」

「ナリヒにえれば私達よーちゃんとおない歳だもんね」

「「」のまま帰るわけに行かないし。ゼリヒシヨウが

「ナリヒだ!」

影分身ナルトと変化ナルトを使つて30代へりこのおじさんを出す。

「何するの?」

「ついてくれば解ルる」

「「」の子達が全裸で公園に居たので近くの店で服を買つて此処に
れてきたんです」

俺達は今、警察署の前に居る。名田は全裸で公園に居た家で少年達の
補導だ。

しかし、俺たちは一言も答えない。ずっと泣き続けている。

当然、嘘泣シテクきだ。

「名前は?」

「君達は何で全裸で公園に居たのかな？　お父さんやお母さんも？」

「

「弱つたな。結局何も聞き出せないまま子供たちは寝ちゃうし、いつたいこの子達はどうの誰なんだ？」

俺と柚香は今後の計画を立てるために夢の中で現実を見ながら作戦会議中である。

「どうする？　」

「暇だし、蜜柑たちとの遊びに行こう

俺と清見が蜜柑の夢に行くと丁度ドッヂボールをしている所だった。

「卑怯だぞ！ アリス使つなつて自分で行つたくせに手前はアリスつかつてんじやねえか！」

「何言つてんねん。うちのアリスは無効化からドッヂボールで使つても意味ないし。第一、まだそんなにアリス使つこなされへんし」

「じゃあ何でわざからアリスが使えないんだよー。」「え？」

「何でやうひ。うちは無効化使つてへんし、うち以外に向つ使え
る人があるんなら話は別やけど。調子でも悪いんやううか？」「

心読みが蜜柑の心を読んで言つた台詞にクラスが騒然となつた。

「心読みが読めたつてことは間違いなく無効化使つてなかつたつて
ことだよな」

それを見た蜜柑が挑発する

「アリス使われへんくてそこまで焦るつてことはアリス無しではな
く等には勝たれへんつて証明したも同然やな」

「なんだとー？」

「上等だ！ 手前らなんかアリスを使つまでもねえ！ ぶつ潰してやるー！」

「今日のところはもう引き分けだ。次は違う種目でリベンジだからな。」

ドッヂボールはその後、特に変わったことは無く、原作通りに進んだ。

結局、董の怪我と暗躍が無くなつたことが最大の違いだろう。

「ドッヂボールしてる間、無効化使つてたの、伯父さんだよね

「おつ、昔暴走族やつてた影響で卑怯な」とこいつとしてる奴は判るからな。アリスト使おうとしたときだけ無効化使つたんだ」

俺たちは今、病院で手術中なので麻酔が効いて寝てるため蜜柑を強制睡眠させて会話している。

「蜜柑、俺たちアリス学園に入ることになった

「えつ、ほんま?」

「本当だ

蜜柑の姿が搔き消えた。直前に聞こえた「起きる、星無し」という言葉から察するに授業中の眞理りに気づかれて口を起されたのだ。

「やあそろ起きよつか

起きたら鳴海先生の姿が有った。

「あ、おきた？」

「此処、どこ？ 僕達は何でこんなところにいるんだ？」

「ここはアリス学園。君たちはアリスになつたからアリス学園に入学する事になつたんだ」

柚香が会話に加わつた。

「私達の服を着替えさせたのは先生ですか」

「君たちの服を着替えさせたのは学園の医者だよ。他に質問は無い？」

「無いよ」

「教室に案内してくれ」

俺と柚香が教室に入ると生徒の殆どが騒然となつた。

「安積清見です。特技は手品です。俺の手品はたいてい種も仕掛け
もありません」

「安積柚香です。手品は主に清見のサポートをしてます」

「蜜柑ちゃん、来てくれないかな」

「うん、いいよ」

蜜柑が来ると同時に手に隠し持つていたアリスストーンを短刀の石形にする。当然見た目で判らないように色も変えてある。

「此処で取り出したるは2本の短刀」

短刀を2本とも投げて壁に突き刺す。

「切れ味は御覧のとおり」

柚香が蜜柑をぶん投げて短刀の上に乗つけると同時にコの字型に変化させたアリスストーンで蜜柑の四肢を拘束する。

「お次に・・・」

短刀が蜜柑の周囲の壁を一周して刺さるように投げる。

次に日本刀を作り出し、チョークの中に投げ四角く幾つかに切り刻む。

「こ」の切れ味抜群の日本刀を今から刃の付いた状態で飲みます」

言つが早いか日本刀を飲み込む柚香。

もつとも日本刀はアリスストーンを変化させた物だから体内に戻しているだけだが。

柚香は計30本の刀を飲み込んだ。

当然、手品は大成功で俺と柚香はあっさりクラスに馴染むことができた。

「」の日、学園に激震が走った。

「確かに俺は聞いたんだ……アリス祭3日目のイベント祭で、そのメインゲストにアリス出身のハリウッドスター・レオが予定されている事を！ しかも、そのレオがこの学園の付属病院に来るのだ！…」

「「「「ギャヒ　　ンーー」「」「」」

学園アリスの世界に転生したつてのにレオの名前聞いたの転生してから今日が初めてだな。ほんとに有名か怪しいもんだ。

「清見。門で待ち伏せして蜜柑ちゃんが門を出るとき便乗して一緒に出よっか」

「そうだな、柚香。ちょっと耳を貸してくれないか」

「何で柚香と清美までついてきたん？」

「クラスメイトが誘拐されたって聞いたりつけていくのは当然でしょ」

田の前には柚香が夢使いを使って操った人攫いがあいた鍵をかけ

てないバイクが有る。

「あれを使って追いかけないか」

蜜柑と伯父さんが入れ替わってバイクに乗った。柚香は蜜柑の後ろに乗り、俺はパークをバイクの後ろに強引に乗せてからバイクを発進させた。

「ちょっと、あなたたちバイク乗れるの！？」

俺たちは質問には答えずに無言でバイクを進める。

しばりぐすると原作と同じ位置でバイクを転倒され頭を打つて気絶した。

何かをかじる音がするので田が覚めれば、蜜柑がロープを齧つてるとこりだった。

「パー、マ、清見起きたで」

「蜜柑、通信機で蜜に連絡取れ」

「あ、」

蜜柑は言われるまで存在を忘れてたより慌てて通信機のスイッチを入れた。

「ああ、蜜柑？」

あんたスイッチ入れるの遅いのよ。…何か外野が煩いから代わるわね。それよりアンタ大丈夫？」

「もしもし、蜜柑ちゃん？ 僕だけど聞こえる？」

分かることだけでいいから、状況を教えて貰いたいんだけど

「どこの港の倉庫で結界が張られとつて、全員縛られてる。棗の具合が悪そうやねん」

「全員、危ないから今から黙つて聞いて、こちらに状況が伝わるようによいマイクのスイッチはオンにしておくんだ。その手足を縛る縄は自力で解くか、それが無理なら、夏田君に無理してもらつて縄を燃やすんだ」

「無効化で結界を如何にかできないか？ 試すだけでもやらないよりはましだろ」

「わかった」

蜜柑が無効化を使つと同時に石^{アリス}使いを使つてナイフを作り、全員の縄を切る。

「あと、確実に逃げられるよつて縛られたふりを続けるんだ」

「神野だ。聞こえるか、自分のアリスをなるべき敵に明かしちゃ行かんぞ。自分の手の内を見せるといつことは相手が対処してくるといつことだ。」こちらに不利になるといつことになる

「それと一番重要なこと。何があつてもレオの声を聞いちゃいけない。もし聞いたら・・・」

そこで蜜柑の通信機がとられた。

「成程。通信機だつたんだコレ」

やっぱ消しても揺らすのとあんま変わらないか。

「紫堂の結界揺らすなら鬼も角、消すなんて黒猫じゃないな。誰がやつた。むしろ何をした」

「玲生…お前なんでこなんかに」

「僕のほうこそアナほどのひとが、なんで学園の犬なんかに收まつてんですかー？ あなたはこっちの人だと思つていたのにな。先

輩の可愛い生徒勝手にお預かりしちゃってスミマセン。ま、預かっていつてもお返しする口なんて来ませんけどね」

「玲つ」「

ブツツ

通信機が切られた。

「知ってるかも知れないと、僕のアリスは声フェロモンでね。組織では主にこのアリスは洗脳に使ってる」

「お前のアリスは?」

「わた・・・あ・・・体質・・・」

カラソッ

棗が何かを投げてレオの気を逸らした。

「へえ、まだ反抗する力残つてたんだ。
お望み通りターゲット変更つと。
なるべくならお前は僕の声で無害にしてからボスに引き渡してやり
たかったからね」

棗の顔を覗き込んで続ける

「どうせ学園に戻つても煙たい目で見られながら汚れ仕事だろ? それなら俺たちの仲間になるのと何が違う?」

「やめやつ」

蜜柑がレオを突き飛ばした。

「さつきから何勝手なこと言つてんねん。棗があんたらなんかの仲間になるか！」

「・・・おい、こいつ。レオさんの声聞いて、何で動けるんだ？」

「お前、まさか。無効化なのか？」

グイツ

蜜柑をレオが引っ張つた。

「こ」の顔…………似てなくもない。

あの女に」

イヤホンに向かつて話しかける。

「今すぐデータを調べる。あの女について10年前を徹底的に洗いだせ。面白いことになりそうだ」

レオはビックリに立ち去る。

「おいパーマ。今なら結構緩いままだ。確か犬猫体質だな。直感と嗅覚のアリスト利かせる。ここの近くに何がある？」

「……人気は無し。南方の…2つ先?の倉庫から大量の火薬と薬品の匂いがするわ」

「お前ら、俺が合図したら全力で入り口まで走れ。逃げるなら奴らの気がそれた今だ」

「ちょ、何する気」

「走つたら絶対にとまるな、どっちかでもぶち逃げ切つたらビリバカしてこの場所を学園に伝えろ」

「あんた、走れる体とちやうしゃん」

「行け！」

俺たちが走ると当然、追いかけようとも動き出しが、

「動くな！　動くとこの先にあるダイナマイトに火をつけるやつすれば此処なんて一瞬で火の海じゃね？」

「はあ？　何を言つている。お前にこの結界の中そんな離れた所に火をつけることなんて」

「できる。何なら試すか」

そもそも結界消されたままだし。

「せつせつと行け！」

俺たちは今度こそ走り出した。

しばらく走つてると蜜柑が立ち止まり、

「皆、先行つてて」

「え？」

「うち、棗を見てくる」

もと来た道を引き返した。

「俺は蜜柑についていくから柚香とパー・マは先に行け！」

俺は当然、それについていく

「今爆破すれば、吹つ飛びるのは俺らだけ、無駄な努力にならずにすむ」

いざ棗が火をつけよつとしたその時、

「棗、やめて」

蜜柑が棗を突き飛ばし、無効化で炎を消した。

「阿呆。何本氣で火付けてんねん、あんた死ぬきか？　目覚ませボ
ケ」

「力を抜け」

レオが声^{アリス}フエロモンを使った。

「蜜柑、素手と鉄パイプどっちがいい？」

蜜柑に聞くと見せかけて実際には伯父さんに問いかけている。

『蜜柑の体格から考えて鉄パイプを使ったほうが良いだろう』

意図は正確に伝わったようで伯父さんが答えた。蜜柑に石^{アリス}使いで作ったアリストーンを投げ渡すと、伯父さんと蜜柑が入れ替わる。

「蜜柑、応戦するぞ」

伯父さん
蜜柑は無言で鉄パイプを構える。

俺達はなかなか善戦したがあまりに多勢に無勢、それに体格差がありすぎた。

結局、蜜柑は原作と同じように壁にたきつけられ、棗はアリストーンで火薬に引火させたのだった。

「棗は？ アイツ体へろへろのくせに力使って爆発を」

混乱した蜜柑が落ち着くまでまつてから話しかける。

「棗は絶対安静で眠り続けるけど命に別状は無い」

「蜜柑ちゃんは丸一日寝てて当分田を覚ましそうに無いから強引やんや旨が心配してるよ。しかもこの夢の状態だと、少なくとも後一田は田が覚めないよ」

「起きたら心配かけたことちやんと謝れよ・・・って起きる直前に見た夢じゃないと忘れるか」

「アリス や」^{アリス}へんは夢使いを使って忘れないようにするから大丈夫」

蜜柑は田を覚ますとまづ最初に謝った。

「心配かけてごめんな」

蜜柑は蜜柑の額に手をのせて言った。

「熱は無こよひつね。・・・もしかして偽者とか」

「その扱いは酷すぎるんじゃないかな」

「蜜柑があんなことがあった後で騒がない上に人に心配をかけたことに自力で気づくなんてありえないわ」

「こくらつかでも一日間田をあまたへんかつたら心配かけるってことくらいわかるよ」

「自力で気づいてないだろ」

「・・・確かに清見に言われるまで気づかへんかったけど」

「とつあえず今回の軽はずみな行動に関しては学校に言つてから怖い先生の説教がまつてます」

鳴海先生にとつてもじんじん=怖い先生なのか

「今日は君達の活躍で、大方の先生は君達に感謝します。よつて蜜柑ちゃんー」

「は、はーっ」

蜜柑は慌てて返事をする。

「シングル昇格…おめでとう」

鳴海は、蜜柑の手に星のバッジを一つ落とした。

「棗に見せびらかしてくるーー。」

そのまま病室を飛び出す。

「あ、蜜柑ちゃんっ！！！ 粟は今、誘拐事件のせいで面会謝絶ッ！
！…って、聞いちゃいないね」

鳴海が慌てて止めたが、蜜柑はすでに廊下の角を曲がっていつて
しまった。

「ま、いつか」

「来週から前期試験で -す

「年に2回のこの試験の成績は、星階級審査や優等生賞レースに大きく関わってきます！ ゆ・え・に みんな頑張ってね！」

「分かっているとは思うが、学科試験なのでアリスの使用は厳禁。バレたら不正行為としてペナルティがあるから気を付けるよ。」に。ま、制御アイテムつけさせられるだろーし、大丈夫だろうけど」

「勿論、アリス以外の不正行為については言うに及ばず、だ。その時は……分かつてるな？」

それぞれ教師からの説明に、力なく返事する生徒。

卷之三

中でも蜜柑は、教師が去った後の教室で叫んでいた。

うえ――つ、試験!! ウチ試験大きい――つつ!!

「私もテストなんか嫌いだー！」

「まあ、馬鹿には辛い関門よね」

俺は周囲に聞こえないよう、小声で話しかける。

「柚香、今回のは小学校のテストだって忘れてないか。勉強なら前世で大学レベルまで教えただろ」

「あ、そうだった」

「え、2人とも馬鹿なの？ どれくらい？ 僕より？」

「かなり…」

ウキウキで問いかけてくるキツネ田君に蜜が答える。

そこで委員長が慌ててフォローに入った。

「あっ、でも蜜柑ちゃん！ この試験頑張つて上位とれば、クラスに1人優等生賞の候補になれるかもだよ？」

「「えー、ムリムリ」」

それに対し心読み君とキツネ田君が否定する。

「そういう家族との面会の権利を貰うとされるらしいぞ」

「えつホンマ！？」

「これを見ろ」

俺が突き出したプリントには、めざましい活躍をした者には家族との面会の権利を貰うとして…と書かれている。

「ウチつつ、今すぐ勉強頑張るつー…！」

「柚香は頑張んないのか」

柚香は周囲には聞こえないように小声で答える

「私は会いたくなつたらいつでも夢使いアリスを使って会いにいけるもの」

「えっとじじゃあ、僕でよかつたら分かんない事とか何でも聞いてね」

さつそく委員長と、なぜか流架も巻き込んでの勉強会が始まった。

「全部分からない……」

「え・つと……」

「何で俺が……」

ぶつぶつ文句を言う流架。

その傍らでキツネ目君が心読み君に問い合わせた。

「あれ、今井は一緒に勉強しないの？」

「うん。何か断られちゃったみたいだよ

遡ること数分前。

『試験勉強つて同レベルの人間でないとあまり意味ないと思つの
よね』

『……』

『馬鹿つてつづけうだし……』

相変わらずな扱いだが、蜜柑はくじけず柚香と一緒に学力チェックにチャレンジする。

まづキッネ目君から。

「2と4分の1 + 6分の3は?」

「え・うと…」

「2ヶ12文の9」

続いて心読み君。

「【しけん】を漢字で書け」

「え……」

「試験」

最後に流架。

「1192つへぬい」

「……………」

「鎌倉幕府」

『……』

「アホだつ！」

「こいつ本物のアホだつ！」

一瞬の間の後、一気に馬鹿にされる蜜柑。

最悪の結果で学力チェックは幕を閉じた。

それを見ていた棗や梓音の取り巻きが、棗に耳打ちする。

「また馬鹿共が流架君巻き込んで何かしてますね…。ヤキ入れますか」

「……」

取り巻きの言葉に黙つたまま、冷ややかな目で蜜柑を見つめる。

…と、蜜柑がその視線に気付いた。

スペシャルバカが何を今更…

ビバカ

本家馬鹿

バカは一生何やつてもバカなんだよ

田で様々なことを訴えられ、流架に泣きつく。

「そ…『そんな感じの田で見られた』…と言われても… 壱はそんなこと思つたりしないよ、多分…」

「伯父さん、生前アリス学園の教師だったんだろ？ 勉強教えてくれないか」

「いや、俺も勉強嫌いなんだ」

「それが教師の台詞か。仕方ない人は学ぶよりも教えるほうが覚えるって言つしな。朝までみっちり教え込んでやる」

「寝てる間にする勉強は効率が良いからいつもより覚えれて楽しいよ」

「寝てる間以外ずっと勉強付けにしてやる」

それを聞いた柚香真つ青になつたがう言つ。

「それって実質休憩時間ゼロつてことじや…」

「楽しいお勉強時間の始まりだ

俺はこいつを笑いながら言つ、当然真っ黒な笑みを浮かべながら・

・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3620z/>

学園アリスの世界に転生

2011年12月21日16時49分発行